

12月7日から参加者募集

## 江川水田型市民農園で

# 昔ながらの米作り体験

市では、大規模な谷津田空間を残し、貴重な動植物が多く息づく江川地区で、ビオトープ(生物生息空間)の再生整備を進めています。今年4月には、市民参加による「水田型市民農園」もオープンし、市内外から600人の親子連れなどが、一年を通して減農薬による昔ながらの米作りに取り組みました。来年は、26区画から450区画に拡大して、開設する予定で、12月7日から参加者の募集を開始します。



田植えや収穫は参加者同士で協力して

ガエル、ホタルなど貴重な動植物も多く息づいています。

市の最南部で利根運河に隣接し、大規模な谷津田空間を残す

江川地区には、オオタカやサシバなどの猛禽類や、ニホンアカ

同地区は、かつては大手開発事業者による住宅地整備が計画されていましたが、自然保護団体

## 野田の「自然との共生」の取組みを 東京・名古屋の国際会議などで紹介

来年10月、生物の多様性に関する国際会議(COP10)が名古屋で開催されるにあたり、生物の多様性と都市や自治体の関



江川地区でのビオトープ化などを紹介

わりが重要な議題となっていることから、11月12日、(財)日本生態系協会主催の国際フォーラムが東京・千駄ヶ谷の津田ホール(写真)で開催されました。

野田市は先進地事例として、ドイツ、アメリカに続き、江川地区でのビオトープ化への取組みや減農薬による農業の推進、さらに南関東にコウノトリやトキが舞うような環境づくりを進めていきたいと、自治体関係者や自然保護団体など約450人を前に、根本崇野田市長がスライドを交えて講演しました。

また、13日は「COP10」のプレ国際自治体会議が名古屋の(財)国際協力機構(JICA)中部国際センターで行われ、104自治体約200人の前で、12日同様に野田市の自然との共生の取組みについて、根本市長が発表しました。

と共同で、平成16年に「自然環境保護対策基本計画」を策定し、現在では、約90ヘクタールの区域で、里山の風景を保全しつつ、自然保護を優先した農業経営を行えるような、ビオトープ化(生物生息空間)を進めています。18年には、農業生産法人(株)

野田自然共生ファームを設立し、農地の取得を始め、同時に、取得した農地の水路整備や復田作業などを進めてきました。

復田も順調に進み、試験栽培などで収穫もできることが確認できたことから、市では今年4月に、「水田型市民農園」をオープンしました。

### 今年市内外から600人が参加

市内外から、親子連れや団体など約600人が参加し、大規模な谷津田や里山の風景を楽しみながら、自分の手で苗を植え、草を取り、刈り取りの秋を迎えるといった、有機減農薬による米作りを体験しました。

さらに、米作りだけでなく、ザリガニ釣りや野草を使った昔遊びなどのイベントも行い、現在残されている貴重な里山の田園風景を次世代に残していく心を養っていただきました。

### 初心者には職員も支援

市民農園での米づくりは、(株)野田自然共生ファームの職員からアドバイスを受けながら行いますので、初めて稲作をされる方も安心して栽培ができます。また、田植えや草刈りなどの

農作業は、参加者全員で助け合いますので、小さなお子さんも一緒に参加することができます。募集内容は次のとおりです。

#### 【区画数】

先着450区画  
※原則1人1区画、1区画は約30平方メートルです。

#### 【利用期間】

平成22年4月～9月

#### 【利用料金】

3千500円。子ども(小学生以下)の利用料金は千500円。3歳以下の子は無料

※保護者2人と子ども1人が申し込んだ場合、3区画となり、料金は8千500円となります。なお、3歳以下の子は、区画に含まれません。また、小学生以下の方単独での申し込みはできません。

※費用は米作りの経費のほかに、ビオトープ整備にも使われます。

#### 【最低補償】

1区画あたり玄米5キログラム(田植え、草刈り、自然観察会、稲刈りのうち、最低2回の参加が必要)

#### 【申込方法】

12月7日(土)～22年1月29日(金)にはがき(住所・参加者氏名・電話番号を明記)か直接

電話で、〒270-0235尾崎2-241-1(株)野田自然共生ファーム ☎7157-4200へ

※先着順ですので、募集区画数になりしだい受付は終了します。

#### 【問合せ】

農政課